「日本写真保存センター」調査活動報告（21）

写真による記録 ― 遺産を資産に

松本 徳彦（副会長）

出来事を記録し後世に伝える手段としては、絵画や彫刻が古くから用いられていた。19 世紀中頃に発明されたダゲレオ・タイプの発明によって、記録手段に革新が起こった。それが写真である。事物を瞬時にしかも精緻に記録する手段としての写真は、あっというまに絵画を凌駕し、その後の記録手段として急速に発展した。そして約 170 年後に再び変革が起こった。それがデジタル技術である。いまやデジタル技術を利用しないものはないほどの進化である。

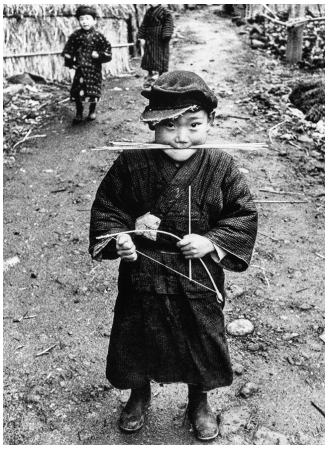
こうした記録手段の変遷もあるが、私たちはこれまで先輩たちによって、記録されてきた膨大な写真を精査することによって、過去の出来事や伝統文化を後世に残し伝承することの必要性を感じている。写真保存センターの役割はこうした遺産を資産にする作業でもある。

岩宮武二（1920 ～ 1989）
日本文化の伝承と仏教遺跡の記録に尽力

1920（大正 9）年米子で生まれた岩宮武二は、大正末期から昭和にかけて隆盛を極めていた絵画志向の「芸術写真」の代表的な日本光画協会（主宰山本牧彦 28 年）の系列で、山陰の塩谷定好によって結成された米子写友会（1931 年結成）に加わり、先輩の植田正治、堀内初太郎らとアマチュア時代を過ごす。大阪の造船所に務め、関西写壇の重鎮安井仲治, 上田備山の推薦で丹平写真倶楽部に入会（39 年）。「早春」で特選受賞。戦後は瑛九らとデモクラート芸術協会（51 年）を創設し、モダニズム傾向の造型感覚にあふれた作品を次々と発表し脚光を浴びる。その代表的なカラー作品に「マヌカン」（54 年）がある。この頃から「佐渡」に何度も渡り、厳しい風土とその中で生きる人々の暮らしを，粗い粒子のモノクロで表現する。これがかえって日本海から吹き付ける風雪に耐えながら暮らす、島民の日常を浮き彫りにする効果をあげ、55 年個展、59 年写真集『佐渡島』を著わす。

「日覆」1946 年

経済成長期に差しかかった折り、コマーシャル分野でも目覚ましい活躍をする。研ぎ澄まされた造型感覚で、日本の伝統的な「かたち」をモチーフに、鮮やかな色彩と造型美を徹底的に追求した大型の写真集『かたち・日本の伝承』（62 年）を上梓し、日本写真協会年度賞を受賞する。この頃から海外にも取材範囲を広げ、なかでも東南アジア、中東に強い関心を示し、『アンコール・ワット』（84 年）、『ラダック曼荼羅』（87 年）、『アジアの仏像』（89 年）、『ボロブドゥール』（90 年）と次々出版する。いずれも大作で、いまではテロで破壊された貴重な仏像なども撮影している。



「佐渡　腕白小僧」1956 年

国内では『日本のやしろ 日光』（62 年）、『厳島』（64 年）、『宮廷の庭』（68 年）、『日本海』（72 年）、『京都』（78 年）と枚挙に暇がないほどの多数の写真集を出版され海外版も含めると数十冊に及ぶ多作であった。

また、1966 年から大阪芸術大学の写真学科教授として、後輩の指導に当たるなど、作家活動のほか教育分野での活動など関西での写真界に大きな足跡を残された。写真原板や資料は最後の助手であった近藤宏樹会員の元で保管されていたものから収集した。

写真原板の収集作業　豊中　リアル・フォトグラフ　2016 年
（撮影／松本徳彦）

芳賀日出男（1921～　）
民俗写真の先駆者

芳賀日出男は1958年銀座の小西六フォトギャラリーで、古来からの稲作儀礼を撮った「田の神」を催した。わが国の農村に残る信仰と生産、娯楽が一緒になった伝統的行事を「正月さま」「種蒔き祝い」「大田植」「虫送り」「新稲初と稲喰れ」「田の神講」「あえのこと」の7部構成で展示した。評論家の伊奈信男は「情緒に溺れることなく、民俗学と写真家の両方の立場から対象をはっきりと見据え、その核心的なものをドキュメントしている」（アサヒカメラ年鑑59年版）と評価。また民俗学者の柳田国男には「いままで写真は1枚で表現するものと思っていたが、行事を幾つにも分けて撮って、順番に並べるとその意味がよくわかるね」と褒められたと言い、氏は「断片的な写真を組写真化することで、時間や異なった面が汲み取れ、客観視することができる」と語る。（小著『写真家のコンタクト探検』平凡社96年）

古くから祭りや民俗信仰、行事などを撮る写真家は数多い。が、民俗的な風習や暮らしにまで踏み込んで捉えた写真家は少ない。なかでも1921（大正10）年旧満州大連市で生まれた芳賀日出男は、39年単身で上京し、慶応義塾大学予科に入学、慶応カメラクラブに入会し、野島康三らの指導を受け木村伊兵衛や三木淳、船山克、長野重一などと交流を深める。41年文学部中国文学科の教授奥野信太郎の薫陶を受け、折口信夫から民俗学を学ぶ。戦後、日本通信社に入社。

この頃から民俗行事や芸能を生涯のテーマと定め、全国の村々を巡り精力的に撮影を始める。55年九学会連合の奄美諸島共同民俗調査に参加し、182日間に及ぶ民俗資料の撮影をする。平凡社発行、柳田国男監修の『綜合日本民俗語彙』に民俗資料写真が掲載される。とくに日本人の生活文化の原型と言われる「稲作農民」の年中行事を撮影し、58年個展「田の神」を開く。翌年『田の神・日本の稲作儀礼』（平凡社）を発行。63年秋田の「なまはげ」を、ウイーン大学のヨーゼフ・クライナーと撮影。これがヨーロッパの民俗行事を撮るきっかけとなる。70年大阪万博の祭り広場のプロデューサーを務める。以後、毎年世界の祭りを撮りに海外へ。85年日本と世界の祭り民俗行事に関わるフォトライブラリーを開設する。各地で写真展と出版活動を続ける。97年稲作文化の集大成『日本の民俗』（上下2巻クレオ）を発行する。

収穫感謝祭の儀礼　田の神　あえのこと　1954年

方相氏（ほうそうし）　京都平安神宮の節分祭　1982年

1985年に開設された「芳賀日出男フォトライブラリー」は、わが国の民俗信仰から芸能の専門ライブラリーの先駆である。収蔵されている写真はカラーモノクロを含め約40万点以上の検索ができる。

お願い

あなたの写真原板（フィルム、乾板等）は大丈夫ですか？
現像済みのフィルムは支持体の性質上、時間が経過すると経年劣化が起こります。保管箱を開けて、酢酸臭がするようでしたら、ビネガーシンドロームが起こっています。
急いで、「写真保存センター」にお問い合わせください。
TEL：03-3265-7451　又は 03-6272-4331

芳賀ライブラリーの画像検索画面　2016年（撮影／松本徳彦）